

文京洙さんに聞く 半世紀にわたる研究の軌跡とその時代相

AJI インタビュー

2022 年 7 月 26 日 (火)

インタビューイー：文京洙 (立命館大学名誉教授)

インタビュアー：李 眞恵 (OIC 総合研究機構 専門研究員)

李：本日は立命館大学名誉教授の文京洙先生をお招きしており、色々お話をお聞かせいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

一番目の質問から始めたいと思います。先生は立命館大学において韓国に関する研究や韓国語の教育、そして在日をめぐる研究などに長年貢献なさってきたわけですが、先生が研究の道へお進みになるきっかけはどのようなものだったのでしょうか。また、その後の研究生生活についても教えてください。

文：いただいた質問はどれも難しい質問なので、なかなか上手く答えられるかわかりません。韓国で 386 世代と呼ばれる、1980 年代に大学生活をした人たちの影響で 80 年代は社会思想や社会運動が大きく転換する時代でした。マルクス主義をはじめ急進的な社会思想が復活して、学生たちが、反独裁民主化ということで、学生運動に加わらない者はいないのではないかとぐらいに社会運動にのめり込んでいました。

その 386 世代が今、韓国社会の中核にいるわけですが、韓国の民主化運動や社会変革に取り組みながら、運動だけではなくて研究者になった人が結構たくさんいます。私もそんな感じです。在日の私たちの世代の研究者は（それほど多くないのですが）そのような人が多いです。だから、最初から何かの研究者になろうという人はあまりいませんでした。

私たちは 70 年代に大学を出るわけですが、その時代は外国人が大学の先生になるとか、研究者になるというのはすごく難しい時代でし

た。就職も難しいし、在日の問題、権益擁護運動、あるいは韓国の民主化運動など——あの頃は韓国に直接行って、捕まったりもする独裁政権の時代なのですが——、社会運動はある意味で当然やらなきゃいけないみたいなどころがありました。

大学を出ても70年代では就職が難しいので、モラトリアムのような感じで大学院に行って、アルバイトを続けながら社会的な取り組みもするというような生活をしていました。そうこうしている間に大学もそれなりに国際化がすすんで朝鮮・韓国の研究や言語教育の枠が広がってある意味では成り行きで研究者になったようなところがあります。

私が普通の日本人の研究者と違う点は、韓国の386世代のように日常の色々な取り組みをやっている中で、その延長線上で研究を位置づけてやっている面があって、例えば在日の研究といっても研究という感じではなくて、済州島の四・三事件の問題も半分は取り組まなければいけない問題として取り組む中で色々なことを書いたり、調べたり、あるいはネットワークを作ったりというようにしています。

李：80年代の韓国の社会変化と言いますか、大学生が活発に社会に参加しながら運動したということは、子供の頃から教科書で見えてある程度は理解しているのですが、日本の社会の中で在日の方も、そういう影響を受けて社会運動を行っていたということについて、先生からお話をいただければ。

文：少し違うところがあるかも知れませんが、韓国で言うと朝鮮戦争があって、いわゆるマルクス主義を中心とした進歩的な潮流、左翼的な潮流が、人的にも組織的にも思想的にも途絶えてしまうわけです。

70年代にも学生運動は盛んなわけですが、それは反共という枠組みの民主化運動と言えます。80年代になって、その枠が外れて急進的なマルクス主義だとか、あるいは主體思想チュエチエなどが学生たちを捉えるようになります。一方、70年代に日本で私たちが様々な取り組みや研究を始めた時は、少し韓国の学生運動と違う方向でした。この頃の日本はやはり、マルクス主義や社会主義などの影響が非常に強い。北朝鮮の系列の総連の勢力も健在でした。

そういう社会的空気の中かで、私自身もどちらかというと総連の方の枠組みにいて、大学生の運動などに参加していました。あの時代は韓学同（韓国学生同盟）だとか韓青同（韓国青年同盟）とか、民団の中で韓国の軍事独裁に反対する、あるいは民団そのものを民主化するという若い人達の動きがすごく活発になった、それが60年代から70年代でした。

もちろんそういうこととは全然関係なく、普通に大学生活を送る、韓国・北朝鮮のことは嫌いだというような在日も多いのですが、今から考えると相当盛んに民主化運動や統一運動、あるいは在日の権益擁護運動——この流れはそれまでの本国志向的な運動とは別の流れとして台頭してくるのですが——が70年代から80年代には非常に盛んでした。そのような状況で私の友人も何人か研究者になっています。社会科学系の在日の研究者はほとんどそうかも知れません。

李：ありがとうございます。次の質問に参りたいと思います。先生ご自身の在日としての認識や生き方と研究者としての在日を研究するという事の間に違いもあるかと思いますが、そのあたりはいかがでしょうか。

文：これあまり違いません。さっき言ったように、その日常の中で色々な取り組みをやっていて、その延長で研究になってるわけだから、そういう意味ではそれほど方向性は変わらないと思います。

李：わかりました。先生より前の世代の方々や同じ世代の方々との交流の中で、特に思い出やエピソードなどがあれば教えてください。

文：そうですね。これはもうたくさんあります。私たちは二世なので私の上の世代の人達はほとんど総連系にいて、総連の中で民族学校の教員をしたり、総連傘下の新聞社にいたりした人達なのですが、60年代入ると総連が唯一思想だとか個人崇拜が激しくなって、いられなくなって出ていく。そういう人達が戦後の在日の研究者の第一世代なわけです。

名前を挙げると文学者では、金石範(キム・ソクポム)先生や金時鐘(キム・シジョン)先生、あるいは亡くなられたが歴史研究では姜在彦(カン・ジェオン)先生や李進熙(イ・ジニ)先生などがいらっしやいます。この人達は20年代から30年代初めのお生まれで、その後の世代に文学者の李恢成(イ・フェソン)先生や歴史学者の姜徳相(カン・ドクサン)先生などがいらっしやいます。

そのような先生方、つまり70年代後半から総連を出て行った知識人達のネットワークや世界があるわけです。そこに『三千里』という雑誌があって、これ季刊誌ですが、このような雑誌を中心として集まっておられて、そのような先生方との交流のなかで学ばせてもらうことが多かった。私は特に両親が済州島出身なので、早い時期から四・三事件に取り組んでおられたキム・ソクポム先生との付き合いが結構長いです。そこで在日の状況を日本社会に訴える、あるいは本国社会に訴える、そういった発信の仕事を雑誌を通じてやるわけです。『三千里』の1号は、1万3千部刷ってたちまち3千部が増刷されるような勢いでした。そのような時代だったので、結構社会的な発信力や影響力があって、そういう先生方と一緒に仕事をして色々な交流があるし、本も何冊か一緒に出しています。

四・三事件との関連では、キム・ソクポム先生とキム・シジョン先生の対談の本で進行役をさせていただいたこともあります。ただ、この世代が生きたのは要するにナショナリズムの時代です。国民だとか、民族が自明の価値として考えられた時代で、本国への帰属ということも自明の価値、そういう世代です。その世代の中でも色々考え方が違い対立があり、総連とまた対立したりするのですが。

李：先生、お話の途中ですみません。「本国」というのは韓国……

文：なるほど、南も北もあわせて「祖国」という言い方が在日の世界でも一般的かも知れません。ただ私は「祖国」と言うと色々感情が入り込むので、少し中立的に「本国」という言い方をします。それは韓国であったり、北朝鮮であったり、だから両方が入っています。北朝鮮の呼び方が大変で、北朝鮮というと怒る人もいるし、そのまま朝鮮

という略称がいいのかも知れないですが、私はひっくるめて「本国」という言い方をしています。

先ほどの話の続きですが、北朝鮮であれ韓国であれ、あるいは朝鮮半島全体であれ、そこに帰属するという価値観です。しかし在日の生活実態そのものは日本に根付いていて、日本の地域社会の住民として定住しているわけです。にも関わらず、観念としては本国に帰属するということを、ある意味では自明の価値として——当時は学術的な活動も社会運動もそうですが——全てがそこに収斂されるようなところがあって、それに対する違和感は相当ありました。その辺の違和感は90年代になると相当はっきり出てきますが、それが国民国家とか、民族という規範や枠組みが揺らぎ始めた時代なわけです。

日本でも自治体が内なる国際化を言い始めるし、日本人の他者認識が大きく変化する時代で、立命館の国際関係学部もそういう時代の流れのなかで88年にできています。学問の世界でも国民国家批判だとか、国民国家を相対化するという見方が、ある意味当たり前になってきました。だからその辺の一世の皆さんとの違い、ある意味で葛藤とか、それは相当あります。

これがまた難しいのはなかなか世代論で割り切れないところがあって、私たちの下の三世の在日の研究者のなかには、「民族」を自明の価値として強調し出すということがあって、講演でも言ったのですが、やはり先祖返りするみたいなところがあります。その辺との微妙な食い違い、すれ違いのようなものをずっと抱えながらやっています。私と同じ世代でも、やはり伝統的な民族主義的な思考を持っている人達も多いし、そのような人達との関係をどうするかみたいな課題は、未だに色々な場面で突き付けられます。

李：今のお話もそうですし、この間の先生のセミナーでは在日の歴史的な展開について詳細なお話を伺い、先生ご自身の人生に結び付き、それぞれの時代の深い背景を学ぶことができたと思います。私が研究しているカザフスタンのコリョ・サラムについても、南北の分断ということが、当地人達のアイデンティティに非常に大きな影響を落としたと思います。朝鮮戦争で南北に分かれたことは在日を含めて、コリョ・

サラムももちろん含めて、世界中でコリアン・ディアスポラに一番大きな影響を与えたと言っても良いのでしょうか。あるいは戦前・戦後の時代、日本と本国との関係、それを含めてそういうものが一番大事ということでしょうか。それについて、どうお考えでしょうか。

文：もちろん分断の影響は強い。あらゆる意味で大きな影響があって、どちらかでも統一していれば、在日の問題そのものがなくなる、という考え方さえありました。

1960年の4月、学生革命で韓国が揺れていて統一が近いのでは、という空気が在日の世界でもあって、総連の指導者たちは統一すれば在日のあらゆる問題が解決されるという言い方さえされていました。しかし本当はそうではないわけです。本当はそうではないというのは、講演会でも強調したのですが、戦前から在日は定住し、日本社会に根付いているわけです。

かつては在日は強制連行で日本に来た人達が戦後の在日を構成したというような言い方がされてきたのですが、これはもう完全に真実ではないわけです。30年代にはすでに定住して、子供もいて、家族で日本で暮らしている。二世に関しても、もう41年には——少しょう覚えの数字で言う——30万人も二世が生まれてるわけです。朝鮮語もろくに出来ないし、日本人との結婚も相当多かったし、そういう意味では、戦後の在日朝鮮人論とていうのは、出発点から在日が日本社会に根付いて定住していたということを忘れさられた上で、民族主義の論理に収斂してしまうところがあります。

この20年くらいずっと強調しているのですが、在日はもともと民族とか国民とかという観点から言うと非常に中途半端な存在で、ある意味では日本人でもあるし、ある意味では朝鮮人でもあるという言い方もするのですが、その言い方はともかくとして、大事なことは、定住していたということです。この社会を構成する住民だったということです。

戦後の50年代までの運動は、住民であることを前提として、例えば生活保護を獲得する闘争だとかを地域社会では日本人と一緒にやってるわけです。総連もそういう課題を重視していました。それ

が一気に変わるのは、58年の帰国運動の頃からです。在日の日常とか思想がナショナリズムに根こそぎ吸い取られていくような過程が、50年代末から60年代に起こります。しかも分断しているから、その分断がナショナリズムの中に持ち込まれて、韓国か北朝鮮かの二者択一を迫られ、韓国系の民団はそれまで力が弱かったのですが、日韓条約以降は総連を上回るぐらいの勢いになってくる。そうして完全に在日社会が分断したのが60年代、70年代です。

在日は日本社会に根づきながら、観念としては本国ばかりに向かう時代でした。ただそういう中でも70年代に入ってくると、そういう民族運動とあまり関係なかった二世が台頭してきますが、結婚だとか就職だとか子育てだとかに直面すると、やはり日本社会に定住していることを前提にして、差別反対や権益擁護運動に取り組まなければならないという潮流が70年代に台頭するようになります。台頭して、その民族への志向と、在日志向・本国志向なのかという議論も起こってきます。いずれにしても分断の影響もあってそういう形で在日が分岐してくるのが70年代です。

文：分断の影響というのは、おそらくカザフスタンのコリョ・サラムのことを考える上でもそうだし、世界に750万人だけいるコリアン・ディアスポラにとっても、分断してるということに相当大きな意味があるのだと思います。しかし、統一したからといって、それでディアスポラが抱えている問題が全て無くなるかということ、それはそうではないと思います。

李：分かりました。では、次に参ります。次の質問はそれほど複雑ではなく、比較的簡単なものだと思います。カザフスタンのコリョ・サラムと在日を比べると、一番大きな違いというのは、民族学校とか朝鮮語学校の存在による言語の状況、つまり在日の方々は朝鮮語とか韓国語が話せるということだと思いますが、実際カザフスタンでは、朝鮮語、韓国語を学ぶ機会が非常に少なくなったということをしごく感じております。在日の方々の言語の状況について、そういう理解で、朝鮮語や韓国語が話せるということによろしいでしょうか。

文：どう思いますか。在日でも話せる人は少ないです。私は高校まで朝鮮学校出てるのですが、私が通っていた時代だと、うろ覚えの数字で言うと 70 年代で 4 万人とかそのぐらいの人が朝鮮学校に通っています。それでもあの時代の二世の 1/4 ぐらいです。3/4 は日本語学校に行ってるか、あるいは民団系の学校に行くのですが、民団系の学校はそれほど朝鮮語はできません。民団系の学校が建国とか金剛学園とかいくつあるのですが、人数も少ないし、言葉が余りできないまま卒業するということも多い。北朝鮮系の朝鮮学校の場合、ある程度朝鮮語を学びます。これも変な朝鮮語ですが、それでも基礎があるから改めて韓国語をやろうとするとすぐに馴染むようになります。しかし朝鮮学校に行く在日はそれほど多くはないと思うので、在日全体の比率から言うと、やはりできない子が多い。

ただ、最近の傾向で言うと、日本と韓国は同じような文化で、この頃は生活水準も似通ってきて、日本人自身が韓国が好きだったり、韓国語を学ぶ人も増えています。立命館大学でも今は、1000 人以上の学生が韓国語を学んでるわけです。日本自体もそうなってくると、在日の子もやはり改めて自分で韓国語を学ぼうとしたり、あるいは韓国に留学に行ったりする。単に風化・同化していくだけではなくて。最近、あるシンポジウムで「帰還移動」という言葉を使う人がいたのですが、二世、三世がもう一回——例えば、台湾人の二世、三世が改めて台湾行ったり、あるいは中国行ったりするということがあるわけですが——在日もそういう状況が出てきていて、そういう中で、また韓国語、朝鮮語を学ぼうという在日二世、三世も相当増えてきています。

李：それは日本で全体的に韓国語とか韓国への関心が高まっているということもあるからでしょうか？

文：拒否感がなくなってきました。かつてはどうしても韓国人という下に見るようなことが多かったのですが、そういう差別的な感情も若い人のなかでは相当なくなってきたような気がします。

非常に厳しく見る人達には、歴史観が足りないのではないとか、歴史のこと分からないで何が仲が良いとか、底が浅い、という人もいます。もっともな批判ではあると思いますが、全体としては韓国に対する拒否感がなくなって、親しみが相当増えてきています。そういう中で、在日ももう一回、韓国に留学したり、あるいは在日だけでも韓国人と結婚したり、向こうで就職をしたりということが相当増えてきています。

李：逆に韓国人の中でも若い世代では日本旅行が大好きな人も結構多く、京都など本当に好きな人がたくさんいます。

文：そういう状況なのと、カザフスタンの研究しているという韓国人も少しは知っており、論文読んだりしてきて改めて思ったのは——これは李さんにむしろ聞きたいぐらいですが——やはり状況が違うということです。コリョ・サラムと在日の状況で一番違うのは、コリョ・サラムというのはソ連という多民族帝国の中で少数民族として位置づけられてきたし、ソ連の崩壊後はそれぞれの国、カザフスタンとか、タジキスタンとか、中央アジアの独立した国民国家の中に基幹民族がいて、基幹民族を中心に国民統合していかなければならない。その中でコリョ・サラムが位置づけられてるわけです。国民統合を強くしようと言語を指定したり、文化を指定したりという国もあるし——カザフは比較的緩やかで、マイノリティとしての言語、文化をある程度は守るという状況ですが——そういう状況ではありません。

いずれにしろ、大きな枠組みの中で国民統合に向かう流れがあり、その中のマイノリティの集団としてコリョ・サラムが存在しているのに対して、在日の場合はむしろその大きな枠組みの中から排除されてきたわけですから。日本の場合、70年代くらいまでは閉鎖的な一民族一国家への志向性がすごく強くて、その中に入るためには自分を全く否定しなければならない。朝鮮人性を否定して、ある意味で日本人以上に日本人らしくすることによって、中に入ることが許される。そうではない人は排除されたり、よそ者扱いされたり。今はかなり日本社会も多元的に開かれているので——私のように大学教員もいるぐら

いなのですが——元々はそういう国民統合の枠から外れた存在として、ある意味で対立的にアイデンティティの形成をしてきたというところがあるので、そこはもう根本的に違うのではないかと思います。

李：ただ、コリョ・サラムの人々とインタビューする時に、「在日の方とか中国の朝鮮族の方はまだ朝鮮語が話せるんじゃない。それが羨ましいんだよ」という話を結構されます。コリョ・サラムは、ほぼ朝鮮語、韓国語が話せないで、そういうことはよく言われます。

文：アイデンティティだとか、民族マイノリティとして生きていくという時の言葉をどう位置づけるかですね。言葉が決定的だというように私も時々思います。ある意味、在日にとって理想的なのは、越境的な暮らし方なわけです。日本にいるけども、韓国とも色々な接点を持ちながら——これは仕事でもいいし、親族関係でもいいのですが——二重国籍というのが私の理想ですが、越境的な生き方ができるかできないかという時にやはり言葉がすごく重要なわけです。

ただ、ひとりひとりのアイデンティティのあり方としては言葉は必ずしも決定的ではありません。かつては韓国人も日本人みたいに国民だとか、民族に対する見方が非常に硬直していたので、例えば、在日が韓国に行く→そうすると韓国語できない→すると入管の職員が馬鹿にして怒って、「お前はなんで韓国人なのに韓国語できないのか」と言う、そういう扱い方をされてきたわけです。

だからそういう中で、自己否定的感情に陥ってしまうような在日二世、三世も多かったです。いまは名前だけ韓国名ですとか、名字が朝鮮名で下の名前は日本名だとか——立命館の産業社会学部に「孫片田」と名乗っている教員がいますが、「孫」というのは韓国人の姓、「片田」というのも日本人の姓、戸籍上もそうなってるかわからないですが、大学でそう名乗っている人がいたり——結構そういう人もたくさん増えてきてるわけです、在日のルーツというのをはつきり見せながら。昔はそういうのは許されない。中途半端は許してくれなかったわけです。民族的に中途半端というのは、人間的にも至らないみたいに思われてきた面があるので、その中途半端なものが中途半

端のままで生きられるように、日本も韓国も開かれていかなければならない。そういう時には、だから言葉ということを決定的なものとしてあんまり考えない方がいいのではないかと思います。もちろん多少はできるに越したことはないけれど、言葉ができなくても高麗人、言葉ができなくても韓国人というのもいいのではないかと。

李：そうですね。ウズベキスタンのコリョ・サラムで新聞社の代表者の方、キム・ブラジミルさんの、朝鮮語・韓国語を話せないが、自分のアイデンティティは言語ではなくて、キムチを食べることとかパプ（밥＝ライス）を食べること、それが私たちのアイデンティティだよという話を思い出しました。

次、食べ物話に参りたいと思います。先生の本とか講演の中での話を聞いて、済州島出身のご両親が移住してここに居住することになったという話を聞きましたが、先生の子供の時から食べていた韓国料理といいますか、食べ物の味と今のコリアンレストランとかの味の違いはありますか。留学生出身で、たまに日本で、東京や京都、大阪のコリアンレストランに入って食べてみたら少し違うなという、違和感みたいなものを感じていますが、先生はどうですか。

文：私も韓国に行って韓国料理を食べると、なかなかこっちでは同じような料理が……と思うことがあります。私はスндеグッって大好きなのですが、ちゃんとしたスндеグッにはなかなか巡り合えません。スнде（腸詰）のスープとご飯があって、それがすごく好きで、スндеがたくさんパンチャンとして出てきたりするのですが、鶴橋へ行ってもなかなか本物に近い店が……。今はネイティブの人がやってるから、あの辺まで行くと、あるいは新大久保とか。私は東京の三河島というところで育ったのですが、三河島に朝鮮マーケットというのがあって、そこ行くとだいたい朝鮮風の食材が買えました。

ただ、どうなんだろう。韓国そのもののものが現代化して食べ物もその時代に合わせて変わってきているようなので、私たちが在日の世界で食べてきたものとはまた違うかも知れません。済州島出身の親たちのもとで、済州人の集住地域で育っているのですが、大したもの食べ

ていません。豚とか鳥とかそういう素材のイメージで、それとキムチです、それをただ蒸して食べてるだけです。ある意味それがすごく美味しいのですが。

二世というのは、今考えると申し訳ないのですが、親の食べ物、親の文化に対する反発があるわけです。二世にとっては外の世界で接している文化と親たちのそれはあまりにも違うわけで、三世だと二世が親だから外の世界と家にほとんど齟齬がないわけです。二世というのは、一世の家の世界と日本の外の世界がギャップがあるから、家の中でやはり食べ物だとか、考え方とかを含めて、葛藤のようなものが絶えない。それで朝鮮人が嫌になるというケースもあるし、食べ物も、私は親の食べ物というのは半分ぐらいはあまり好きではありませんでした。答えになってませんね。

李：ありがとうございます。先生はこれまで日本はもちろん韓国や北朝鮮の研究者の方々との交流があったと思いますが、先生の研究生活の中で、研究面もそうですが、実際の面も含めて、在日社会と韓国、在日社会と北朝鮮との共通点とか、違いについて感じたことについて、もちろんあるだろうと思いますが、少し聞かせてください。

文：在日の研究者は日本で研究してるから、日本の研究者と同じような感じになるのですが、ただ日本のアカデミックの世界と韓国のアカデミックの世界は、かなり共通、同じようになってきていると思います。それほど違和感はありません。難しいのは北朝鮮ですね。私は朝鮮学校を出て、私の親族も北に帰ったりしているのですが、少し考えるところがあって、私自身は北に行ったこともありません。今度、李さんに発表してもらう「高麗学会」というのは、日本の学会で唯一北朝鮮の研究者と交流がある学会なのですが、私自身はそれほど北朝鮮の研究者と交流してきませんでした。研究者の世界だけではなくて北朝鮮のことをどう考えるかということがすごく難しい問題です。例えば、脱北者の問題です。脱北者が今日本に200人ぐらいいて、脱北者の話を聞く取り組みがありますが、これに加わると右翼だとか反動だとかと言われてまともに議論ができないような状況があるわけです。

北朝鮮のことについては、研究者同士の交流は大切なのですが、日本での北朝鮮研究は色々な意味で限界がある中で研究しているわけです。なにか腫れ物を触るみたいに北朝鮮を扱ってきたのですが、それではもうだめだと思います。今の状況は北朝鮮の話をするとき散々こきおろすか、あるいは礼讃・弁護するか、どちらかみたいになってくるのですが、そういうやり方ではなく、きちんと向き合って議論しなければいけないのではないかと考えています。

李：ありがとうございます。では、次に参ります。在日研究者の世界では、それぞれの個人の経験とか、個人の出身・履歴などによって、それぞれが持つ研究についての観点も異なってくると思います。例えば、在日研究をしている研究者本人が在日である場合もあるし、コリアンである場合もあるし、日本人である場合もあるし、またほかの、アジア人ではなくて欧米人である場合もあると思います。それによって少しずつ観点も違ってくるのではないかと私は思っていますが、先生はご自身が在日であったからこそ、こういう観点を持つことになったというようなことがあれば教えてください。例えば、私は博論を書く時に全く進めなかった時期があって、その時はもう自分が本当にコリョ・サラムだったらもっとできたのでは、と考えたことがありました。もっと理解したいのにできないことが結構あって、そういう部分で少し困ったことがあります。逆に先生はご自身が在日であったからこそ、こういうことができたというようなことがあればお話しください。

文：今、博論で行き詰まった、という話を聞いて、少し思い出したエピソードがあります。2005年ぐらいに在日に関連する本を出したのですが、国際関係学部の同僚でユダヤ人問題を研究されている、私人間としても研究者としても尊敬する先生が、その本を読んで私のポジションが却って羨ましいという感想を言われたことがあります。「やっぱりマイノリティとして抱えている問題がたくさんあるっていうのが、この本でよく分かった。それが羨ましい」と言われたわけです。ちょっとどういうふうに対応していいか困りました。しかしその

気持ち、今の博論で行き詰まったという話と、ちょっと似てるようなところがあるような気がします。

ある意味で韓国の研究についても、民主化という課題があって、それは研究する上での課題はもういくらでもあって、テーマもいくらでもあるわけなのですが、韓国に生まれ育った韓国人にはない視点だとか枠組みだとかはやはり自分なりにあるのではないかと思います。

在日の研究者といっても色々いるわけです。在日ですが、やはり本国的な価値を大事にしてる研究者もいるし、三世の中でもそういう研究者は少なくありません。最近の流行りの言葉で言う——さっきも話に出ましたが——やはり越境的に、狭間だとか間（あいだ）だとか、そういう経験や感覚が学問的に、何と言いますか、一番得をしているのではないかなという感じがしています。かつてはそういう中途半端な特質が人間的にも至らないみたいにみられていて、そういう価値を見出せなかったのですが、それなりに韓国も日本も多元的に開かれてくる中で、そういう中途半端な人間が生きるスペースも広がっていく中で、むしろそういう狭間の価値観だとか、難しい言葉でいうと positionality だとか、そういったものがメリットになっているような状況が出てきているのではないかと思います。

李：ありがとうございます。今のお話を伺って思ったのは、コリョ・サラムの研究をする中で、そういう二重のアイデンティティとか異教性というのは、やはりディアスポラという概念で定義付けようと思ってやっているのですが、先生のお話を伺っていると、先生はすごくディアスポラというポジショニングと近いように思いますが、その点はいかがでしょうか。

文：80年代くらいからだと思いますが、在日のことをやはりディアスポラという言葉で特徴づける議論が現れたような気がします。小説家で言うとイ・フェソンさんなどがやはりパレスチナの人達との交流の中で、ディアスポラという言い方を強調し始めました。だから、それで在日についてもそうです。在日二世の最も有力な思想家で徐京植

(ソ・キョンシク)という人がいて——私と同世代ですが——彼は私のことを批判していて、私の議論が在日志向だと誤解しているようです。本国志向と在日志向みたいなものがあるのですが、私は済州の研究や取り組みもやっているし、最近出した本『文在寅時代の韓国』でも本国にも色々関わっています。在日志向でも本国志向でもない、あるいは在日志向でもあるし、本国志向であるというスタンスで取り組みや研究をしています。

ただ在日の中で、ディアスポラをどう受け止めるかということ、やはり本国に向かうということになります。ディアスポラの本来の定義がそうなのかも分かりませんが、心は本国に向かうのだけれど、本国に帰れない、本国以外の地に離散して存在するのだけれど、思想なり生き方なり価値観がそこに向かっていて、そこに帰属し収斂するというのがディアスポラに対する私のイメージです。しかし、そこはちょっと違うのではないかと思います。必ずしも本国に向かう必要はなくて、私流に強いてディアスポラを解釈すると、それは従来の国民だとか民族だとかという枠組みでは割り切れない集団というのが、私なりの解釈です。こういう考えは本来のディアスポラの定義とは違うのかも知れませんが、自己流の解釈では少し違うのであまりディアスポラという言葉は使いません。

李：おっしゃっていることは良く分かります。私は昔は、離散する人で帰りたいというイメージでしたが、今はそうではなく二つのアイデンティティがあるというイメージです。だからさっき先生がおっしゃった二重国籍が一番良いという状態をディアスポラ、二重文化性というように捉えて、コリョ・サラムもカザフスタンとかウズベキスタンから今本国にまさに戻ってくる。戻ってくるのですが、本当は本国ではない、既に長く向こうで暮らしてるわけですから。二重にディアスポラになってるという研究を少し始めているのですが、そういう意味で、私が使いたい新しいディアスポラ概念と、先生がおっしゃっていたのがすごく近いなと思いました。

文：そう言っていただくとありがたいです。

李：最後に、これは先生のセミナーの時に私が質問したかったことですが、在日研究者として若手の皆さん、在日研究をやっている人にももちろん、私みたいなコリアンの研究やっている新人の皆さんに一言お願いできますか。

文：実は私はそういう話が結構苦手です。小杉先生を見ていて、すごく羨ましいというか、若い研究者をこれだけ育てようとしてるところに本当に感服してるのですが、私はだめなんですよ。

大学教員としても元々は朝鮮語で入ってきたわけです。だから大学院の指導も限られていて、副査のレベルです。それはそれで自主的、実質的に院生や若い研究者に関わってきたつもりですが、システム上はあまり関係ないので。さらに最近是在日研究も非常に盛んになっていて、三世、四世で研究者がすごく出てきてるわけです。有能な本当に卓越した論文を書く研究者がいて、これは私からすると、もうほとんどライバルなわけです、あなたも含めて。

言葉では、さっきから言っている間(あいだ)性だとか、異教性だとか、複数性をもっと大事にするような研究をしてほしいと思うのですが、一部でやはり先祖返りのような状況もあるし、それはそれでどんどん論争したりしていかなければと思ってます。

基本的にはもう何かを教えるというよりも、私はこういうふうに生きた、後ろでそういうことを見て参考にしてくださいくらいの事しかできません。何かを教えるとかは、今はあまりそういう余裕がありません。

李：頑張って先生の後ろを見て走っていきたいと思います。ありがとうございます。

今日の話でいくつか確認したいところがあるのですが、先生のお話を伺っていると、立命館大学は先生がいらした頃は、まだ韓国研究とか韓国語とかをそれほどやっていなかったと。

文：全くなかったです。

李：しかし、今は日本の中でも在日の先生とか、あるいは韓国から来ている先生とかもたくさんいるし、もっと他の国を色々入れて、すごく多文化が進んだ大学だと評価されています。先生は、何によってこのようになってきたとお考えですか。もし昔はそうでなかったとしたら、立命館大学は何が良かったのでしょうか。

文：私は94年に立命に赴任して来たのですが、立命で初めて朝鮮語が初修外国語で——ここでは初修外国語といいます、いわゆる第二外国語ことです——設置されて、その担当者として任用されたわけですね。3回生、4回生を対象としたいわゆる外書購読のような科目はロシア語もイタリア語もある中で朝鮮語もあったのですが、教養課程で学ぶ初修外国語としては全学で設置されていませんでした。朝鮮人の教員、在日の教員は一人だけいらっしゃいました。教養の哲学の先生でしたが。

だからここは、色々な評価がありうるわけですが、私が赴任した頃は大学が大きく変わろうとしていた時期かもしれません。立命館はある時期少し落ち込んでいて、新しい理事長、改革的な職員上がりの理事長が、時代の趨勢を見極めながら、大学を大胆に改革していく——80年代の初めぐらいからでしょうか——その改革の目玉の一つが教学の国際化ということで88年に国際関係学部できますし、90年にAPUが開学します。外国人の学生の比率を半分にするという大学を作ったわけです。80年代から、85年プラザ合意があって、日本社会が少し開かれて多元化して行きますが、そういう状況の変化を敏感に先取りして、大学改革を進めたということが今の国際化に繋がったのではないのでしょうか、平凡な言い方ですが。

李：ありがとうございます。先ほど先生がおっしゃっていた中で、在日も三世ぐらいになるとほとんど韓国語ができないということと、最近また改めて勉強するという動きが起こっているということですが、日本も韓国も長い間、非常に硬直した民族の定義、国民の定義を持っていたという状況で、時代がこのように変わってくると基本の紐帯は

言語であるという考え方も出てきます。だから「日本人」ではなく「日本語人」という考え方をする先生もいらっしゃいます。日本語人だったら国籍があるとかないとか、そういうことは関係なく、日本もほとんど外国出身、あるいはミックスが出てきています。しかし、そこで在日の人達は、言語的には自分達は日本語であるということで、アイデンティティとまた少しズレがありますが、そこはどのように皆さんは考えていらっしゃるのでしょうか。

文：そこはすごく難しいです。在日の文学者は、だから言葉の問題で葛藤してきました。

これはご質問の問題と、少しベクトルが違うかもしれませんが、なかなか中途半端な状態を肯定的にポジティブに見られないということの一つの要因は、国民だとか、民族に対して非常に画一的な見方が支配していたということがあるわけです。

もう一つの要因は、日本的なことイコール植民地主義というものがあるわけです。今流行りの言葉で言うとポストコロニアルの問題です。そこでなかなか日本語を肯定できないけれど、日本語しか使えないというジレンマの中できたと思うのですが、そこは少し私はそれこそ二者択一で、あまりにもストイックに考えてきた面があります。もう少しゆるく考えてもいいし、日本語だけど少し特異な日本語だとか、あるいは言葉以外で韓国的なものを大事にするだとか、そういう方向もあっていいんじゃないかと思ってます。

李：ありがとうございます。韓国人としてみると、私自身は自分の個人的な関係もあって、漢字を前から知っています。日本とすごく近くて、留学も日本に行くようになったのですが、韓国全体としてはもう長いこと漢字を捨ててしまっていて、漢字文化圏であることのメリットがあまりないような文化状況になっていると思うのですが、先生自身はこういう漢字文化圏で——日本はミックスしていますが——育って、教育を受け、言葉使っておられます。韓国文化は漢字を捨てることで良かった面もあると思うのですが、何か失ったものもあるのかなと思ったりもするのですが、そのあたりどうお感じになってますか。

文：私たちの感覚で言うと、それは漢字がある程度あったほうがいいと思います。やむを得ず部分的に漢字で表現したりもするのだけれど、実際に韓国にいる人達の感覚で言うとなんのかというのは……

李：あった方が良かったのではないかと思います。

文：それとどうでしょう、新しい言葉をなかなか作れないのでは。漢字の意味を組み合わせ、新しい言葉を作っていくということが出来ないのではないかという気がします。

李：韓国では中学校、高等学校では、まだ選択科目として存在は知っているのですが、学校自体がそれを選ぶかどうかの問題もあるので。

文：ときおり漢字ブームがあるようで、漢字の検定試験のようなものがある、それを受ける人がいっぱいいるようですが、どうですかね。研究者の世界は、やはり英語です。

李：韓国は多分漢字より英語の方が重視されているような気がします。

文：ものすごく英語が重視されているようですが、あれは何かというか、英語は研究者の言語として発達してるところもあるので、それもあるのではないかという気がします。

李：そういう意味での国際化は、日本よりずっと進んでいますよね。

文：そうですね。私も苦手だから。

李：最後の質問といいますか、先生のこの前の講演と今日の話を伺っていて改めて思ったのは、戦前の日本は、植民地主義の良し悪しの問題は脇に置いて、帝國的日本というものがあったわけです。それで1億火の玉と言っていた時の1億は全部入れての1億で、その後それ

をやめたらあの当時の人口で考えると 7000 万人ぐらいですよ。それはものすごい多文化主義、多文化の時代で——そこに色々な問題がもちろんありましたが。ところが、日本は戦争に負けたとたんに、それを全部捨ててしまって、今の日本は今更ながら多文化共生とか言っていますが、かつてやっていたことを全て忘れてしまっているような気がします。先生がおっしゃるように在日の人達も、実は戦前から移住者として、住んで普通に暮らしていたんだということもみんな忘れてしまっている。

植民地主義はいけないとか、それは一つの帝国としての日本の底の浅さではないでしょうか、欧米に学んで追いつこうとして、ところがイギリスなどを見ると、帝國的遺産は良くも悪くも全く否定していません。そのことがイギリスの豊かさにも多文化性みたいにつながって、今や、首相にそういう人達から出てくるか、こないかみたいな時代にすんなったというところから見ると、日本というのは戦後の国民の定義が何か逆にすごく浅い所に後退した、というような感じがします。

本当はもっと違う生き方、帝国が一から百まで悪い、植民地主義がいけないという話ではなく、そういった経験の中から色々な良いものを取り出すということがあるのではないかという印象を、お話を伺っていて持ちました。それを捨てて、もう一度非国際の時から始める、愚かとか、硬直した国民主義から始めるという道を選んだんだなあというのを話を伺っていて、改めてすごく思ったのですが、そこはいかがですか。

文：戦争に負けた国と勝った国の違いのようなものもあるので、ヨーロッパの色々な帝国の経験と比較しないといけないと思います。戦争に勝ったイギリスやフランスは植民地の問題に相当に苦労しながら、多文化主義の内実を深めながら再編した面があります。ところが戦争に負けた日本は全くそういう問題と向き合うことなく、そのまま切り捨てられているわけです。帝国としての記憶や植民地のことはきれいに忘れて、改めてこじんまりと自分たちだけで、同じような人間だけで社会を作っていこうということです。

高度成長の時代も、ヨーロッパでは旧植民地を中心に移民を導入し、

彼らが高度成長を底辺で支えて、それなりに多文化主義が成長しました。日本はまったく違って、地方からの大量の出稼ぎの人たちが高度成長を支えます。だから、むしろ生活様式や意識が標準化して一民族一国家的な感覚が強まりました。私の実感から言っても 70 年代の日本は本当に等質的で一枚岩だったという感じがあります。植民地支配や、侵略戦争に対する反省がほとんどないまま、改めて一民族一国家で平和な国を作ろうという無意識の合意のようなものがあって、その中で在日は排除されたり、同化を暗黙の裡に強制されたりしてきたのが、ようやく改めて 80 年代から少しずつ開かれていくということではないでしょうか。

李：どうもありがとうございました。私は学術振興会の外国人特別研究員になって、この大学にご縁があって来て、その時先生がアジア・日本研究所の副所長をなさっていた最後の年に重なっていました。それで色々なご縁を得ることができて、今回も先生にこんなに色々話を伺ったりすることができて、本当に幸せでありたいと思っております。本日はどうもありがとうございました。

略歴と業績



文京洙（MUN Gyongsu／ムン・ギョンス）立命館大学名誉教授、同大学アジア・日本研究所上席研究員

【略歴】

- 1977 年 中央大学法学部政治学科卒業
- 1980 年 法政大学社会科学研究科修士課程修了
～法政大学、神奈川大学などで非常勤講師などを経て～
- 1989 年 国際基督教大学常勤助手（～ 1991 年）
- 1994 年 立命館大学国際関係学部助教授、同教授（1998 ～ 2016 年）
- 2006 年 博士（地域政策学）取得（大阪商業大学）
- 2016 年 立命館大学特任教授、同アジア・日本研究所副所長（～ 2021 年）

【研究業績】

著書（単著）

- 『済州島現代史：公共圏の死滅と再生』新幹社、2005 年
- 『韓国現代史』岩波新書、2005 年

現代の日本と韓国と在日を架橋する：文京洙先生に聞く研究史と生きざま

『在日朝鮮人問題の起源』図書出版クレイン、2007 年

『済州島四・三事件:「島(タムナ)のくに」の死と再生の物語』平凡社、
2008 年、岩波現代文庫、2018 年

『新・韓国現代史』岩波新書、2015 年

『文在寅時代の韓国:「弔い」の民主主義』岩波新書、2020 年

(共著)

『現代韓国への視点』(共著者／鄭章淵)大月書店、1990 年

『在日朝鮮人:歴史と現在』(共著者／水野直樹)岩波書店、2015 年

(単編著)

『アジアの人びとを知る本 第5巻 アジアで生きる人びと』大月書店、
1992 年

『増補・なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか:済州島四・
三事件の記憶と文学』(金石範・金時鐘著)平凡社ライブラリー、
2015 年

(共編著)

『ろうそくデモを越えて—韓国社会はどこに行くのか』(共編者／川瀬
俊治)東方出版、2009 年

『在日コリアン辞典』(国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編
集委員会編:朴一・鄭雅英ほか 12 名)明石書店、2010 年 11 月

『エティック国際関係学』(共編者／奥田宏司・佐藤誠・原毅彦)東信
堂、2011 年

『危機の時代の市民活動:日韓「社会的企業」最前線』(共編者:川瀬
俊治ほか 7 名)東方出版、2012 年

『グローバル・サウスはいま 第2巻 新自由主義下のアジア』(共編
者／藤田和子)ミネルヴァ書房、2016 年

Asia and Japan: Perspectives of History (共編者:小杉泰) Asia-Japan
Research Institute Ritsumeikan University, 2023.

論文（単著）

- 「第7回非同盟諸国首脳会議について」『月刊アジア・アフリカ研究』266号、アジア・アフリカ研究所、1983年6月
- 「国家分析のための機能論的枠組：第三世界における従属的資本主義諸国を中心に（上・下）」『月刊アジア・アフリカ研究』275・276号、アジア・アフリカ研究所、1984年3月・4月
- 「韓国における南北統一運動：1960～61年期を中心に」『月刊アジア・アフリカ研究』281号、アジア・アフリカ研究所、1984年9月
- 「韓国の軍事政権と国民意識」土生長穂・河合恒生編『第三世界の開発と独裁』大月書店、1989年1月
- 「韓国における社会変革論争」『季刊窓』4号、窓社、1990年6月
- 「国際関係の展開と第三世界」土生長穂編『21世紀の第三世界』大月書店、1991年2月
- 「70年代韓国の精神と尹興吉文学」『学苑』619号、昭和女子大学近代文化研究所、1991年5月
- 「韓国社会と市民文化」『アジア・アフリカ研究』31巻4号、アジア・アフリカ研究所、1991年11月
- 「韓国の政治文化と維新体制」小林謙一・川上忠雄編『韓国の経済開発と労使関係：計画と政策』法政大学出版局、1991年12月
- 「現代韓国の都市小説」『学苑』631号、昭和女子大学近代文化研究所、1992年5月
- 「世界史の中の日韓条約」『季刊青丘』16号、青丘文化社、1993年7月
- 「済州島4・3事件前史に関する研究（上）」『済州島』6号、耽羅研究会、1993年11月
- 「在日朝鮮人にとっての国民国家」歴史学研究会編『国民国家を問う』青木書店、1994年5月
- 「近代世界のなかの日本と朝鮮：最近の業績から」『歴史評論』534号、歴史科学協議会、1994年10月
- 「済州島4・3事件前史に関する研究（下）」『済州島』7号、耽羅研究会、1994年12月

現代の日本と韓国と在日を架橋する：文京洙先生に聞く研究史と生きざま

- 「近代日本の国民国家形成と朝鮮」西川長夫・松宮秀治編『幕末明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社、1995年3月
- 「在日朝鮮人にとっての戦後」中村政則他編『戦後日本：占領と戦後改革 第5巻：過去の清算』岩波書店、1995年11月
- 「高度経済成長下の在日朝鮮人」李進熙編『「在日」はいま、：在日韓国朝鮮人の戦後五〇年』青丘文化社、1996年4月
- 「転換期の世界と在日朝鮮人」李進熙編『「在日」はいま、：在日韓国朝鮮人の戦後五〇年』青丘文化社、1996年4月
- 「戦後世界システムの展開と韓国の工業化：1960年代を中心に」中央大学社会科学研究所研究報告『統合するヨーロッパ／重層化するアジア18』1997年3月
- 「日韓関係をめぐって」立命館大学人文科学研究所編『戦後50年をどうみるか：二一世紀への展望のために（上）』人文書院、1998年3月
- 「在日朝鮮人問題の起源」佐藤誠・A. J. フィールドイング編『移動と定住：日欧比較の国際労働移動』同文館、1998年9月
- 「韓国における地域社会の変容と住民自治」『アジア・アフリカ研究』39巻3号、アジア・アフリカ研究所、1999年7月
- 「韓国の都市形成と住民自治：民主化過程における地域主義と住民自治の相克」土生長穂編『開発とグローバリゼーション』柏書房、2000年4月
- 「グローバリゼーションと公共性：韓国における「国民的競争国家」と民主主義」関下稔・小林誠編『統合と分離の国際政治経済学：グローバリゼーションの現代的位相』ナカニシヤ出版、2004年4月
- 「戦後60年と在日朝鮮人：“国民”の呪縛を超えて」『思想』980号、岩波書店、2005年12月
- 「韓国における市民社会と公共圏：デジタル・デモクラシーの射程」松下洵編『途上国社会の現在：国家・開発・市民』法律文化社、2006年2月
- 「韓国における人権：過去・現在・未来」『部落解放』570号、解放出版社、2006年12月

現代の日本と韓国と在日を架橋する：文京洙先生に聞く研究史と生きざま

「戦後在日朝鮮人の歩みと住民自治」富坂キリスト教センター在日朝鮮人の生活と住民自治研究会編『在日外国人の住民自治：川崎と京都から考える』新幹社、2007年2月

「盧武鉉政権の遺産と李明博政権下の韓国」『アジア・アフリカ研究』47巻4号、アジア・アフリカ研究所、2007年12月

“Origins of Current Problems of Korean Residents in Japan,” *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies*, vol 3, no. 1 (July 2009), Center for Islamic Area Studies at Kyoto University

「ドイツ統一と朝鮮半島：ハーバーマスの介入とその後」『神奈川大学評論』65号、2010年3月

「뉴커머와 올드커머：지구화 시대 일본사회의 변화와 재일 한인（ニューカマーとオールドカマー：グローバル時代日本社会の変化と在日コリアン）『재일동포사 총서 10 일본 한인의 역사（상）（在日同胞史叢書10 日本の韓人の歴史（上））』韓国国史編纂委員会、2019年7月

「日本と韓国：歴史意識の相克」『現代の理論』25号、2010年10月

「100年の葛藤を超えて：戦後日韓関係の歩みと相互認識」『アジア・アフリカ研究』51巻1号、アジア・アフリカ研究所、2011年2月

「戦後日韓関係と市民社会の課題：100年の葛藤を超えて」藤田和子・松下列編『新自由主義に揺れるグローバル・サウス：いま世界をどうみるか』ミネルヴァ書房、2012年10月

「戦後在日朝鮮人の生活と日本社会」安田常雄編『シリーズ戦後日本社会の歴史4 社会の境界を生きる人びと：戦後日本の縁』岩波書店、2013年3月

「在日朝鮮人からみる日韓関係：〈国民〉を超えて」磯崎典世・李鍾久編『日韓関係史 1965-2015 Ⅲ 社会・文化』東京大学出版会、2015年10月

「埋もれた記憶を辿る」『抗路：在日総合誌』3号、抗路舎、2016年12月

「韓国“ろうそく革命”と文在寅新政権の課題」『アジア・アフリカ研究』57巻3号、アジア・アフリカ研究所、2017年

現代の日本と韓国と在日を架橋する：文京洙先生に聞く研究史と生きざま

「韓国において“進歩”とは何か：文在寅新政権の行方」『抗路：在日総合誌』4号、抗路舎、2017年11月

“Discussions over the Jeju 4.3 Incident in the Public Sphere,” *The JEJU 4.3 Mass Killing: Atrocity, Justice, and Reconciliation*, edited and published by JEJU 4.3 Peace Foundation, 2018,

「〈四・三事件 70 年〉問題解決の到達点と課題：日本からの視点」『世界』970号、岩波書店、2018年7月

「이행기정의와 제주 4·3 (移行期正義と済州四・三)」『한국학과 조선학 그쟁점과 고려학 (韓国学と朝鮮学その争点と高麗学) 1』国際高麗学会、2018年

「激変する朝鮮半島情勢：変化へのイニシアティブを探る」『現代思想』46巻12号、青土社、2018年8月

「日韓関係、第三の転機か？」『抗路：在日総合誌』6号、抗路舎、2019年9月

「ポスト冷戦期の日韓関係：過去清算と反動の相克」『エトランデュテ』3号、在日本法律家協会、2020年7月

「43과 재일 제주인 재론 (再論)：분단과 배제의 논리를 넘어 (四・三と在日済州人再論：分断と排除の論理を越えて)」『4·3과 역사 (四・三と歴史)』20号、済州四・三研究所、2020年

「済州島、三河島、そして朝鮮籍」李里花編『朝鮮籍とは何か：トランスナショナルの視点から』明石書店、2021年1月

「韓国「四・三特別法」改正：「積弊清算」の新局面」『世界』945号、岩波書店、2021年6月

「済州四・三を考える：在日の被害実態調査から」『抗路：在日総合誌』10号、抗路舎、2022年12月

「재일 제주인의 시각에서 본 제주 4·3：과거청산의 아포리아；법정립적 폭력 (在日済州人の視点からみた済州四・三：過去清算のアポリア；法措定的暴力)」高誠晩編『비판적 4·3 연구 (批判的 四・三研究)』한그루、2023年

“Jeju 4.3 and Zainichi Society: Beyond the Logic of Division and Exclusion” *World Environment and Island Studies*, vol. 13, no.1 (March 30, 2023), the World Association for Island Studies and World Environment and

現代の日本と韓国と在日を架橋する：文京洙先生に聞く研究史と生きざま

Island Institute, Jeju National University.

「漂流する韓国政治：「検察国家」の行方」『アジア・アフリカ研究』

63 巻 1 号、アジア・アフリカ研究所、2023 年

「在日メディアと論争：〈在日論〉の水脈をたどる」『抗路：在日総合誌』

11 号、抗路舎、2023 年 12 月

「吊いの政治学：死者と生者の行き交い 韓国／日本」『抗路：在日総合誌』

12 号、抗路舎、2024 年 12 月

(共著)

「1948 일본행 엑소더스：연합국 최고사령부 보고서를 통해 본 제주

사람들의 밀항 (日本行きエキソダス：連合国最高司令部報告書

を通じてみた済州人の密航)」(共著者：高誠晩)『日本學』58、

東國大学校、2023 年

書評

滝沢秀樹著『韓国の経済発展と社会構造』(御茶の水書房、1992 年)、『ア

ジア経済』33 巻 12 号、アジア経済研究所、1992 年 12 月

崔章集著『現代韓国の政治変動』(中村福治訳、木鐸社、1997 年)、『歴

史学研究』719 号、歴史学研究会、1999 年

伊地知紀子著『生活世界の創造と実践：韓国・済州島の生活誌から』

(御茶の水書房、2000 年)、『日本史研究』476 号、日本史 研究会、

2002 年 4 月

ユ・シミン著『ボクの韓国現代史 1959－2014』(萩原恵美訳、三一書房、

2016 年)、『図書新聞』2016 年 4 月 9 日

장인성 (張寅性) 著『비판적보수주의의심리와논리：현대일본의보수

주의 (現代日本の保守主義：批判的保守主義の心理と論理)』、『日

本研究』68 集、国際日本文化研究センター、2024 年 3 月

朴一著『在日という病：生きづらさの当事者研究』(明石書店、2023 年)、

じんぶん堂、2024 年 1 月 (<https://book.asahi.com/jinbun/article/15096769>)

编者紹介



李眞恵 (LEE Jinhye / イ・ジンヘ)

立命館大学総合研究機構助教。修士（カルチャー・コンテンツ学、韓国外国語大学）および博士（地域研究、京都大学）。

2007年アル・ファラビカザフ国立大学交換留学（2008年2月まで）を経て2009年韓国外国語大学国際地域学部中央アジア学科卒業。2010年、韓国外国語大学一般大学院グローバル・カルチャー・コンテンツ学科カルチャー・コンテンツ学専攻修士課程修了。2019年、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科グローバル地域研究専攻修了（研究指導認定退学）。

2019年より、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任研究員（2022年まで）、日本学術振興会外国人特別研究員（立命館大学、2022年まで）、立命館大学OIC総合研究機構専門研究員（2023年まで）を経て、現職に至る。また2023年10月よりオーストラリア国立大学客員研究員（同年12月まで）。

【主な研究業績】

学位論文

（修士論文）“A Study on Establishing a Museum based upon Lenin Gichi’s Articles from 1986 to 1991,” Department of Global Culture & Contents, Hankuk University of Foreign Studies, February, 2012

現代の日本と韓国と在日を架橋する：文京洙先生に聞く研究史と生きざま

(博士論文)「現代カザフスタンにおける高麗人(コリョ・サラム)社会の変容」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、2019年9月

著書(単著)

『二つのアジアを生きる：現代カザフスタンにおける民族問題と高麗人(コリョ・サラム)ディアスポラの文化変容』ナカニシヤ出版(令和3年度京都大学全学経費成果報告書特別協力経費若手出版助成による出版)、2022年3月

(編著)

Asian Diaspora in the Era of Globalization: Lived Experiences among Different Cultures, Asia-Japan Research Institute (AJI), Ritsumeikan University, December, 2021

論文(単著)

“Social Dynamism of the Korean Diaspora in USSR, Koryo-saram, in Perestroika Period: An Analysis Based upon Articles of Lenin Gichi, from 1986 to 1991,” *World Affairs* 3/34(461): 69–78. School of Foreign Relations and Public Administration, National University of Mongolia, December, 2016

「ペレストロイカ期におけるコリョ・サラムのアイデンティティ形成—1986年–1991年の『レーニン・キチ』の分析から」『イスラーム世界研究』10: 177-191、2017年3月

“Social Transformation of the Korean Diaspora (Koryo-Saram) in Contemporary Kazakhstan based upon Koryo Ilbo,” *Studies of Koreans Abroad* 49: 1–34, October, 2019

Eunjeong Han, Minhwa Han, and Jonghwa Lee, “Identity Formation of the Korean Diaspora (Koryo saram) in Contemporary Kazakhstan: An Analysis Based upon Articles of Koryo Ilbo,” *Korean Diaspora across the World: Homeland in History, Memory, Imagination, Media and Reality*, pp. 131–145. Lexington Books, December, 2019

- “The Contemporary Status of the Ethnic Group in Kazakhstan and the Koryoin’s Nation,” *Asia Review* 11(1): 261–289, April, 2021
- “Preserving the Life and culture of the Korean Diaspora among the Majority: Ethnic Minority Rights in Kazakhstan in the Post-Soviet Era,” *Asian Diaspora in the Era of Globalization: Lived Experiences among Different Cultures* (AJI Books), pp. 47–63. Asia-Japan Research Institute (AJI), Ritsumeikan University, December, 2021
- “Why do Diaspora Re-Emigrate to their Historical “Homelands”? A Case Study of Koryo Saram’s “Return” from Post-Soviet Uzbekistan to South Korea,” *Journal of the Asia-Japan Research Institute (AJI) of Ritsumeikan University* 5: 51–65, October, 2023
- “Should Korean Diaspora Evacuees from Ukraine be Considered “Refugees” or “Ethnic Returnees” in South Korea?” *Ritsumeikan Journal of International Relations and Area Studies* 57: 23–42, December, 2023など。